

## 特別支援学級の「わかる授業、楽しい活動」を創る

西村 敬子先生 (大阪府立佐野支援学校)

前半は、支援学校に勤務されている講師の先生が、地域の小学校へ実際に支援されてきた事例を基に、支援学級に通う児童が「わかる」「楽しい」と思える授業づくりの研究をお話ししてくださいました。

まず初めに、支援学級での学習を、マンツーマンやプリント学習で答えを出すだけの授業ではなく、「集団」で取り組む「わかる」授業への授業改善を、各小学校の先生と共にされてきました。

A 小学校では、「自立活動」に着目され、サーキット運動の改善でした。体を動かす活動の中で、順番を絶対に守らせたり一人の運動を見て応援したりすることで、集団活動でのルールを守り、友達と適切な関わりが持てるようになったそうです。

B 小学校では、「生活単元学習」で主体的に問題を解決する事例を紹介されました。支援学級の中での遠足を、児童が計画段階から参加し、発案したものが遊びのモデルとなることの重要性も説かれました。

C 小学校では、「たなばたかいをしよう」の授業映像を見せてくださり、良い授業のポイントを教えてくださいました。①「今、誰のお話を聞くか」②「どこを見るか」③「今、何をするか」を明確にすることです。また、繰り返し取り組むことで、児童が「わかる・できた」と感じられ、自分の力をプラスに発揮することができることにつながるとありました。

最後に、支援学級はクールダウンをする場所ではなく、「良い学びができ、居心地の良い支援学級」を目指すべきだと話されたのが、印象的でした。



## 第1分科会

## インクルーシブ教育理念に基づいた特別支援教育を考える

### —教育実践の現状と課題—

後上 鐵夫先生 (大阪体育大学教授)

後半は、現在大阪体育大学で教授をされている先生が、インクルーシブ教育とはいったい何なのか、ということテーマにお話ししてくださり、考える場を設けてくださりました。

日常生活の中で、困っている方に声をかける勇気や配慮、優先座席の理解など身近なことからインクルーシブ教育を学びました。インクルーシブ教育とは決して特別なことではなく、「と

もに生きる社会」の実現であり、障がいの有無にかかわらず誰もが人格と個性を尊重し合う社会を目指すことだとわかりました。教育においては、「すべての子どものための教育」であるといえます。

そこで、特別支援教育で求められることは、①自己発見への支援（自分のやりたいこと、できることを見つける支援）②スキル学習への支援（ルールを守り、その中で自己主張ができる支援）③セルフエスティームを高める支援（わかった、できたと自己を肯定できる支援）であり、“今より生活しやすくなるような支援”が支援の本来の目的とお話しされました。

これらのことを踏まえて特別支援教育を行う上で重要なことが、個別の教育支援計画を立てることです。学校が中心となり、福祉・医療等の関係機関と連携し、一人ひとりの教育的支援の内容や評価を明らかにするためであると説かれました。

通常のクラスの先生は、インクルーシブ教育が実現したら一斉指導ができるのか、学級づくりができるのか、と不安に思っていると知りました。その不安をなくすためにも、支援学級の担任が率先して、障がいの理解を共有できる場を作ることが必要だということがわかりました。

資料以上に貴重なお話をしてくださり、非常にたくさんのお話を教えてくださってありがとうございました。まだまだ知らないことがあります。今日教えてくださったことを多くの方と共有したいと思います。

